Major Histocompatibility Complex　2016; 23 (2): 123–125

Terasaki 先生との思い出

南カルフォルニア大学
岩城　裕一

先生とは 1975 年からの関係なので，実に 40 年以上の長きにわたります。特に，1977 年から 1989 年までの 12 年間は，直属の師匠として，本当にいろいろなことを教えていただきました。仕事では常に怖い存在であり続けていましたが，仕事を離れると気さくな先生であり，多く語り合ったことは，今でも私の記憶に鮮明に焼きついています。

私が Pittsburgh 大学に職を得るとき，Terasaki 先生は，当時の移植学会のオピニオンリーダーであった　Sir Peter Morris, Dr. Tony Monaco, Dr. Oscar Salvatierra, Dr. Jon van Rood や Dr. Gerhard Opelz などを束ねて私のために就職応援団を作ってくださいました。生まれ育ち，医学教育を受けたのも日本という私が，当時 39 歳の若さでアメリカでの大学教授のポジションを得，今もアメリカで現役で頑張れているのは，あの時代のリーダー達の Endorse を取りまとめてくださった Terasaki 先生のサポートのお陰である事はいつも自覚しています。

先生とはたくさんの旅，特に日本への旅をご一緒し，多くの会議にも同席させていただきました。先生が残された素晴らしい業績については，多くの方々から紹介されると思いますので，私は旅や会議でのエピソードを紹介して先生の人となりを改めて思い出してみたいと思います。

エピソード 1　下戸

Terasaki 先生は全くお酒を飲めませんでした。会食ではどんな料理が出ても飲み物はコカコーラと相場は決まっていました。日本での宴会などでは多くの方が酒を注ぎにくるので，はじめは難儀していたようでした。ある日，これからは酒宴では必ず自分の隣に座るようにという先生の指示をうけ，早速その晩の宴会から実行。

Terasaki 先生は「ドクター岩城は私の隣に座らせてください」と一言。本来はホストが座席を決めるのですが，Terasaki 先生のご意向とあれば仕方あるまい。先生は，酒注ぎを受けるたびに「私の代わりに岩城が飲みますので彼に注いで下さい」 そして一言，「これで，二人ともハッピーです」

エピソード 2　日本での学会発表

渡米して間もない 1977 年，Terasaki 先生が「日本の学会で私が英語で講演したら，どのくらいの参加者が理解してくれるだろうか？」と尋ねました。私は自分の英語力を鑑みて，「多分 10% くら

いではないでしょうか」と答えた。すると先生は間髪をいれずに「では私が，日本語で発表したらどのくらいの人が分かりますか？」「ほぼ100% でしょう」すると彼は「それでは，私は日本語で発表します。この英語の原稿を日本語にしてください」と。

当時はまだ，ワープロも，日本語に変換可能なコンピューターもない時代。30 ページにもなった私の手書きの日本語訳を肌身離さず，幾度も練習していた Terasaki 先生を思い出すと涙が出てきます。当時の先生の日本語レベルは初級から中級。免疫は“men-eki”とハイフンを入れなければ“メネキ”と読んでしまいます。

その後，Terasaki 先生の日本語力は飛躍的に向上し，素直で丁寧な日本語を話していたことを付け加えておきます。

エピソード 3　日本語でのミーティング

Terasaki ラボでは，毎週月曜日に Terasaki 先生の部屋でランチを食べながらラボミーティングが開かれ，ポスドクやリサーチフェローが順番に研究成果を発表しておりました。当然，英語での発表です。その頃は，日本から留学研究者が常に数人おり，日本語訛りのつたない英語で皆頑張ってなんとか発表していました。ある時，突然，Terasaki 先生が，「自分も日本語を磨きたいので，これからは日本語でのラボミーティングも始めたいがみんな賛成してくれるだろうか」とのこと。ボスの希望は命令なので，その後速やかに日本語ラボミーティングが追加〔毎月〕になったことは自明。某フェローが日本語で研究成果を発表した際，

Terasaki 先生：「君は凄いことをしているんだね。どうしてこんな大切なデータを論文にしないのですか？」

某フェロー：「今まで 1 年間発表してきた俺の英語が全く通じていなかったことが，本日，証明されました……。」

エピソード 4　日本移植学会の一般演題への応募

Terasaki 先生は毎年のように日本の色々な学会に招待をされていました。主に移植領域の学会が多かったのですが，外科学会，輸血学会，組織適合性学会，時には聞いたことのない学会にいたるまでです。毎年招かれていても決して同じ話をせず，常に新しいデータや提言を発信していましたので，ご自身も日本の学会で発表することを楽しみにしてい

たようでした。

ある時，どこの学会からも声がかからない年がありました。

Terasaki 先生：「今年こそ，発表したいデータがあるのに呼ばれないのはどうしてか？」

私：「わかりません」

Terasaki 先生「わかった，じゃあ一般演題で出そう」

私，「先生，一般演題の持ち時間は 7 分ですよ」

Terasaki 先生「7 分もあれば大丈夫」

私，「では応募しましょう」

Terasaki 先生が英語で一般演題に応募したことは主催者側には衝撃だったようです。先生の演題発表は“特別に”25 分にも延長され，大会場での発表とされたのです。この演題発表の後，なかなか拍手の鳴り止まない Standing Ovation を受けました。先生のこの行動こそが，学会の本質を突いていました。

エピソード 5　赤だしぶっかけご飯

大阪の有名な料亭での会食のときでした。先方は 6 人，Terasaki 先生と私が上座です。宴もおわり近くなり，〆のご飯と赤だし椀が出されたとき，先生は赤だしをご飯にかけて，「これが一番美味しいですよ」

それで，参加者全員も同じように赤だしぶっかけご飯をすすりながら，「これが一番美味しいですよね〜」そして誰かが小さな声で，「Terasaki 先生は合理的ですね」

エピソード 6　先生はいつまで働くのですか

ある時，先生に「どのくらいまでお仕事をなされる予定ですか？」とくだらない質問をしてしまったことがあった。Terasaki 先生は「私の父は 90 歳を超えているけれどまだ現役ですよ」

これには参った。

Terasaki 先生。

先生は本当に最後まで仕事をしていましたね。でも 90 歳まで生きなかったのは約束が違うよ……天国でも赤だしぶっかけご飯を食べましたか。でもコーラご飯はまだですよね。

沢山のことを教えていただきました。本当にありがとうございました。ゆっくりお休みください。

合掌

Terasaki HLA

1974

HLA

DNA

Major Histocompatibility Complex　2016; 23 (2): 134–135

赤座先生の思い出

東京大学大学院医学系研究科人類遺伝学分野
徳永　勝士

初めて赤座先生にお会いしたのは，1982 年に十字猛夫先生が世話人として実施した第 8 回日本 HLA ワークショップの時で，私は博士課程の学生でした。当時すでに赤座先生は，日本を代表する HLA の血清学的検査・研究（当時はまだ DNA タイピングはありません）のリーダーの一人であり，先生が独力で開発された「赤座プログラム」は当時も，その後 1991 年に日本が主催した第 11 回国際組織適合性ワークショップ・会議においても，最も有用な血清学的特異性分析用のプログラムでした。私にとって「HLA の血清学」は，赤座プログラムを用いて示された血清–リンパ球反応クラスターを，参加者一同が熱心に議論することから進んできた分野でした。私自身は，その成果を遺伝学的に分析させていただいたことになります。

私は第 11 回国際組織適合性ワークショップ・会議が終わった 1992 年より 3 年余り，十字猛夫先生が所長になられた日本赤十字中央血液センターにおいて研究部課長を務めました。その時すでに名古屋から東京に移り，日赤中央血液センター検査部課長を務められていた赤座先生と，いわば同僚にならせていただいたわけです。私が十字先生より受けていた指示は，遺伝子解析研究のチームを作ることです。そのために何よりも重要なのは，赤座チームの血清学的成果に基づいて私達が HLA 遺伝子解析をし，新たなアリルを同定して報告することと考えました。赤座チームが見出したことと私達が解析した結果を始終やり取りし，効率的に成果につなげるための手段として，赤座先生の課と私達の課の間の壁をパネルに作り替え，廊下に出ないでも自由に行き来できるよう提案したところ，快く同意していただきました。職人肌ですが，酒好きで快活な赤座先生を中心に両課のメンバーが生き生きと活躍し，多数のアリル報告論文など多くの成果を送り出すことができ，実に充実した時間を過ごさせていただきました。

プライベートで忘れられない思い出もひとつ述べさせていただきます。1993 年に鹿児島で最後（第 11 回）の日本 HLA ワークショップ（世話人：鹿児島大学園田俊郎教授）があった際に，赤座先生に屋久島旅行を誘っていただきました。屋久島の素晴らしい自然，特に縄文杉の堂々たる姿を見た深い感動は今でも心にあり，あのような存在に少しでも

① 1990 年，海外学術調査で韓国を訪問
（左より，赤座先生，2 人おいて，徳永，十字先生）

② 1993 年，屋久島縄文杉の前で
（左より，石川善英氏，赤座先生，徳永）

③ 1993 年，屋久島で
（左より 2 人目赤座先生，石川善英氏，徳永）

近づきたいというのが，私の人生の目標のひとつになっています。トビウオの干物の美味を堪能し，退役近い YS11 に搭乗できたことも楽しい思い出です。

赤座先生のあまりに早い訃報は，まったく思いがけないことでただただ呆然とするしかありませんでした。まだ何度もお会いしてお話しできると思っていましたので残念の極みです。HLA という汲めども尽きぬ学問の泉に導いて下さった大先達に深い感謝を表すとともに，赤座先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

Major Histocompatibility Complex　2016; 23 (2): 136–137

赤座先生を偲んで

HLA研究所
田中　秀則

私が赤座先生に最初にお会いしたのは広島大学で行われたHLAの技術研修でした。当時, 私は山口赤十字血液センターに在職しており，HLA クラス II タイピングのための B 細胞の分離技術に苦慮しており，純度の良い B 細胞を分離する方法を取得するために躍起になっておりました。先生には技術的な指導を受けた記憶はあまりなく，基本的な考えを教わったような気がしますが…記憶は定かでありません。

その後，大きく先生との関わりを持つこととなったのが山口赤十字からの異動先である中央赤十字血液センターであり，上司として赤座先生と密接に関わることとなりました。

先生の一番の思い出に残ることは，パソコンによる様々な解析ソフト作成です。先生は，血清解析ソフト（血清の特異性解析）や抗血清を用いたHLA タイピングの「自動判定ソフト」を自前で作成されておりました。作成しては, チェック，修正し，再度チェックの繰り返しで，現場で問題が発生する度に，その内容を先生に伝えるのですが…「使い方が悪い！！」とか「どこが問題なのか？指摘してください…」とか言われました。しかし, 開発者じゃないので,「使い方」とか「どこが」と言われても…といつも当惑しておりましが，先生にとってプログラムとしての問題点を知りたかったのだと思います。

今回，先生との思い出を書くあたり写真を整理してみましたら，その多くがモンゴルに行った際の写真でした。写真①はモンゴルに到着した際の，ULAANBAATAR（ウランバートル）空港内の写真，写真②はモンゴル赤十字社前で撮った写真、写真③は馬頭琴の演奏流れるレストランで食事をした際の写真になります。当時，東北アジア 5 民族の HLA

① 1995 年，ULAANBAATAR（ウランバートル）空港内にて
（左より，赤座先生，十字先生）

② 1995 年，モンゴル赤十字社前にて
（左より，赤座先生，モンゴル大学のチムゲさん，筆者）

③ 1990 年，モンゴルのレストランにて
（左より，十字先生，モンゴル大学のチムゲさん，チムゲさんの上司でバツーリさん，赤座先生）

分布の調査を行う研究の一環として，モンゴルで血清学的な HLA タイピングを行った凍結リンパ球から DNA を抽出し，日本に持ち帰り DNA タイピングを行うプロジェクトでした。モンゴルへの出張は，赤座先生，十字先生と私の 3 人であり，当然このメンバーですと DNA 抽出の作業を行うのは私だけで…。純度良い DNA を抽出する必要があったため，事前に抽出した DNA を手動 PCR（恒温槽 3 台使用）で，HLA 領域を増幅し確認を行いました。その間，両先生は…ゴビ砂漠に視察（観光）…でした。

赤座先生とは，30 年以上お付き合いさせていただきましたが，今思えば，先生はいつもパソコンに向かい，何かプログラムを作成してらしゃいました。何か HLA 検査に関することを手掛けていないと気が済まない性格だったのかもしれません…？　最後に日本の HLA 検査に多大な貢献をされたことに心から尊敬すると共にご冥福をお祈りいたします。

赤座達也先生を偲ぶ

特定非営利活動法人　白血病研究基金を育てる会
小川　公明

赤座先生との関わりは，1980 年代後半の血清学的タイピングの大変革時。

つまり，リンパ球分離をダイナビーズの使用による機械化での大幅な工数の削減。染色もエオジンから PI，CFDA へ変わり，判定もテラスキャン（HLA 自動判定装置）による自動化が進む時代でした。この中での，肝心・要は測定結果から HLA 判定を行う解析の自動化です，この解析プログラムを作成したのが赤座先生でした，通称アカザソフトとの出会いでした。アカザソフトなくしてこの大変革は成就しなかったと思います。HLA を深く理解し，かつプログラムを自在に作れる唯一の人が赤座先生であったと思います。

赤座先生との直接の出会いは，1990 年の日本骨髄バンク設立準備の段階でした，当時，私が所属していた SRL は，日赤さんと共に HLA 検査に関わることになったためその準備の打ち合わせのためでした。当時，広尾にあった日赤中央血液センターの赤座先生を緊張した気持ちで訪問しましが，赤座先生の患者を思う医療者としての優しい魂に共感でき，安堵したことを懐かしく思い出します。

赤座先生と深く付き合うようになったのは，私が 2005 年ベリタスの顧問として机を並べるようになってからです。ここでのメインテーマは，HLA 抗体の解析，つまり不可解な反応を如何に解釈するべきか，行き着いたのがエピトープを基礎にした解析でした。赤座先生得意の解析プログラムの作成です，出来上がったプログラムは，エピトープ解析を主としたため「エピマップ」と命名されました。このエピマップにより，HLA 抗体の交差反応などかなり明確に判明してきました。これで，全て解釈できるかと期待しましたが，現実には力価の異なる複合抗体などもあり，さらに複雑でした。今後も解析プログラムの開発を続けなくてはなりませんでした。この開発が，赤座先生のやり残した仕事となってしまったのが残念でなりません。

赤座先生とは，素面の時も酒を酌み交わしながらも HLA について語り続けていました。ある時，雑談で邪馬台国に触れることがありました。「邪馬台国は九州だよ，弥生時代後期の絹，鉄の鏃など，魏志倭人伝に記載されているものは，近畿より九州が圧倒的発掘されている。したがって九州だよ。エビデンスはもう揃っているよ」赤座先生は熱く語られていました。祖を九州におく私にとって非常に興味深く感じ入ってしまいました。赤座先生は HLA と同じように日本の歴史にも造詣が非常に深いのに驚きました。先生は，信心深い面もあり，それも正しいやり方に拘る性格です。ある時，神社に関する参考書を買い込み勉強を開始されました。そして，一般財団法人日本文化興隆財団の主催する第一回目の神社検定を受検され見事に合格されました。

その頃から私は，機会があれば神社，寺，古墳を赤座先生とめぐるようになりました。一番記憶に残るのは，長崎 JSHI の大会後，レンタカーを借りて 1 週間かけて九州全県，延べ 1000 km を越す，縄文・弥生遺跡，古墳をめぐる旅を過ごしたことです。もちろん毎晩，酒を酌み交わし，HLA と歴史をとことん語り尽くしました。

何事に対しても，真面目に全力で立ち向かう先生でした。HLA を深く愛していた赤座先生が，こんなにもはやく，テラサキ先生を追うように，逝かれてしまった事が残念でなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。